



月刊美術

2021年12月号 ネクストブレイク特集にて『板倉文香』(11月27日～個展開催)をご紹介します

幾層にも破れた空間からのぞく女性の裸体など、現代の多層な社会に生きる女性のもろさと強さを感じていただけたら幸いです。

ITAKURA  
板倉文香

失われゆく  
記憶や感情を  
崩壊する人体と  
ともに描く



2019年かわうそサムホール公募展での受賞を皮切りに東京で発表しつづける板倉。紙に鉛筆による光沢を生かした絵肌と時代を象徴する人物像が多くのコレクターの目を

1993年広島県生まれ。尾道市立芸術大学日本画専攻卒業。2019年銀座・京橋サムホール公募展奨励賞受賞。20年かわうそ画廊で初個展「Enigma」。

展示予定 11月27日～12月2日・かわうそ画廊(新富町)にて個展



00《残》 275,000円(額付)  
30F 鉛筆



00《淡い微睡み》 66,000円(額付)  
6F 鉛筆



釘付けにする。画家は「時間が経つにつれて忘れていってしまう記憶や感情を、風化した壁画や破れ、汚れなどを画面に入れることによって表している」という。植物に絡め取られたり、身体が断片になって崩壊していくイメージは、先行き不透明な現代人が抱く不確かな命の感覚を映し出しているのだろう。女性特有の感度の高さや日本画科で鍛えた確かなデッサン力で時代を捉えた新しい人物像として、注視していきたい。